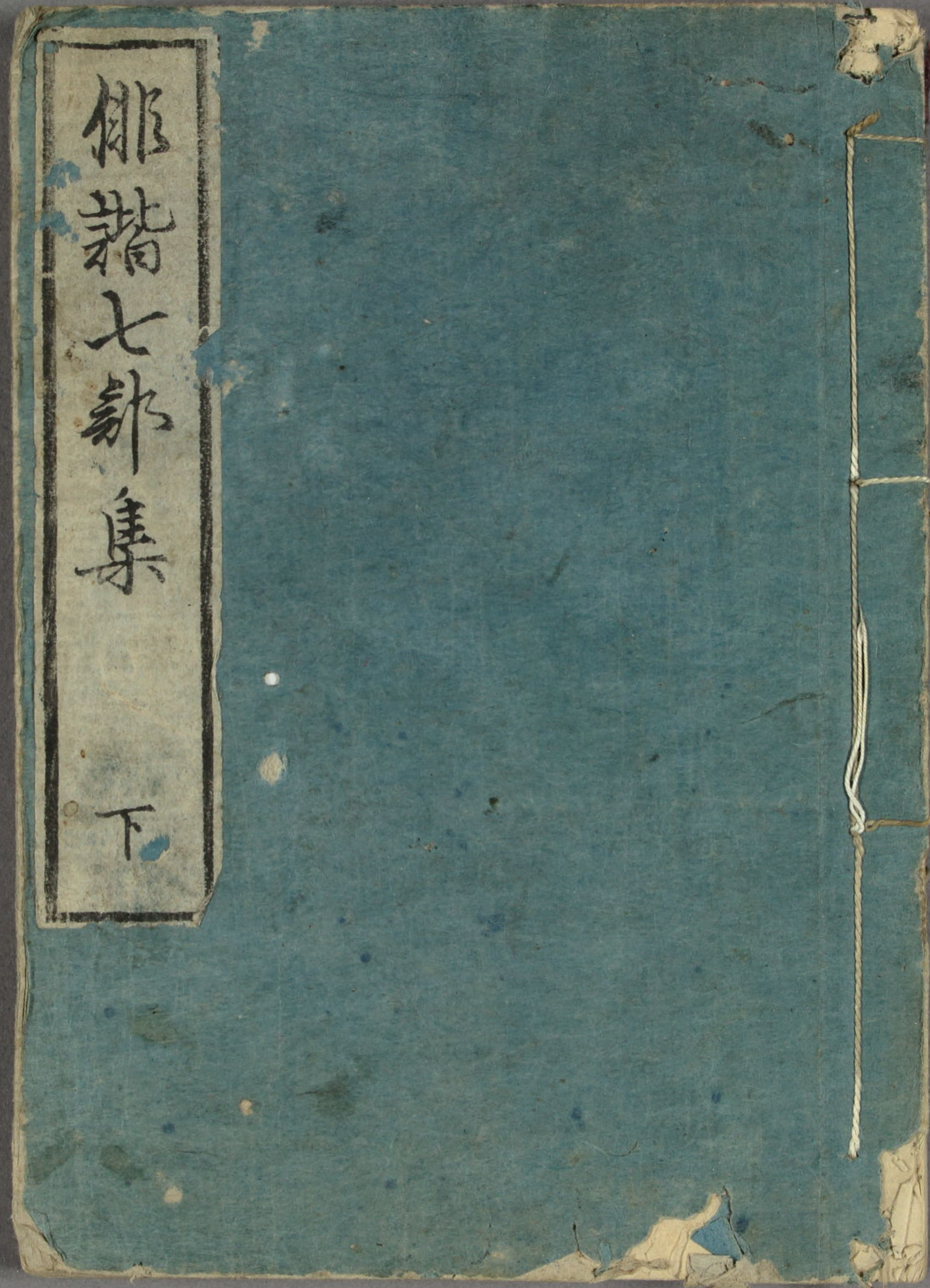
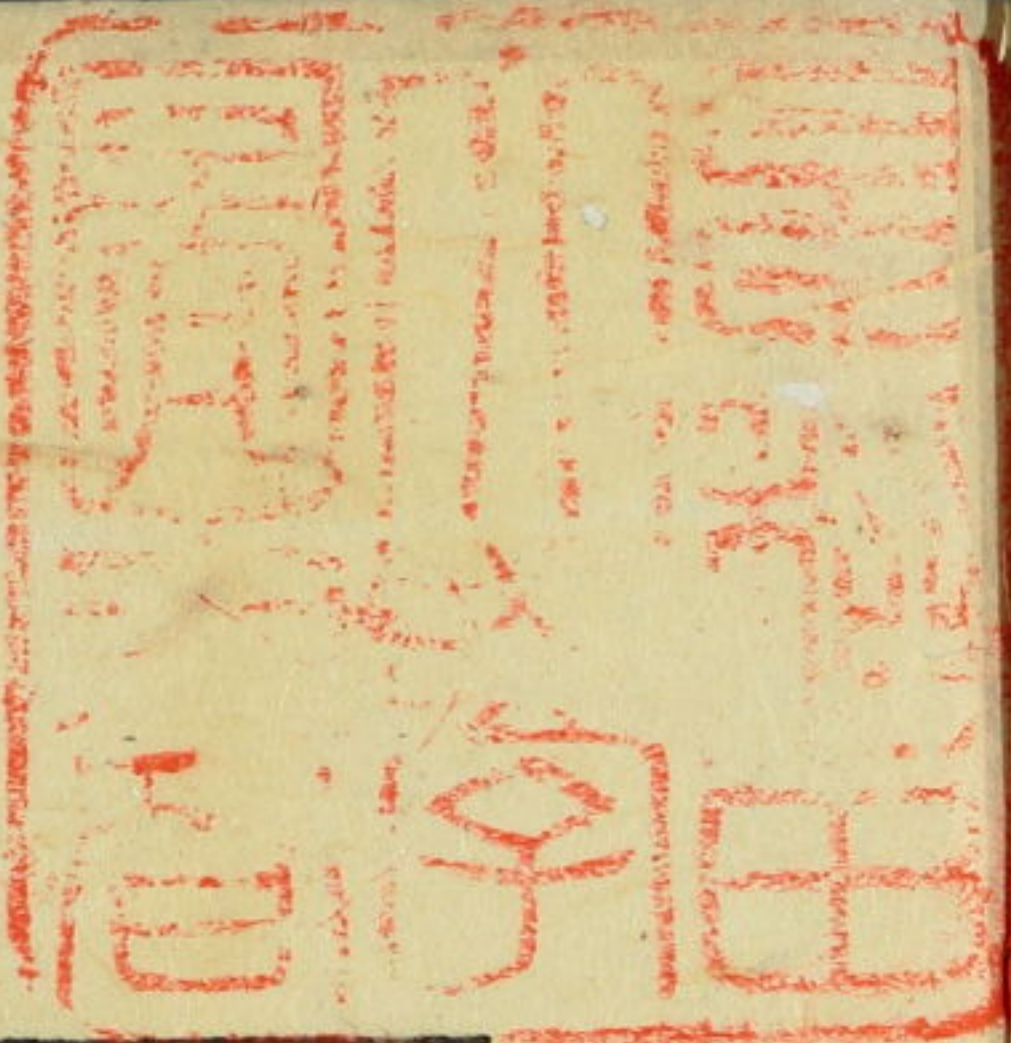




俳諧七部集

下





崇徳序

此書は屏や孤を破利年と云常ふ苦其の軒にわ  
かひるの雲をひまきむ雲を向來をみあつて十のりな  
のて字の野風をたけいけい葉をさかすあつてこれ  
は守る秋あつて二つよ席ふけりて火桶ふけりて炭を  
庵まこれおほむ心より守人の心毎らまゝいかに  
なぐとあつておほむ焼のさかなるを望みよむは  
かきつて金葉の庄の古きと冬あつていかにまゝい  
つと輝のさかす真入つていかにいかにいかに  
さかすのさかすのさかすのさかすのさかすのさかすの  
乃つと出より秋の月よりさかすのさかすのさかすの  
篇なるて青くもあつてさかすのさかすのさかすの

早稲田大学  
文学部図書

雲英末雄  
53-7519



大坂の如きはあつたが細奉を  
 ありし一冊乃ちふね 六月  
 江戸の如きはあつたが向の屋  
 目しやいひむらか袋のり  
 終宵 尼の持病をおさる  
 あんぬやくとまうのりる名月  
 七門丁の茶掛下地 兼てる  
 兼をおさるに居合部と兼  
 町元のつらと碑をたのほ  
 門く押く 主生の金井  
 赤風く小集のいふれを吹  
 ぬる居るまふ耽 くのらぬ

此坡 芭蕉 此坡 芭蕉 此坡 芭蕉 此坡 芭蕉 此坡 芭蕉 此坡 芭蕉 此坡 芭蕉 此坡 芭蕉

下ノ二

江戸の左太むらじの亭をせよ  
 ちんちんりれとらうとらうに  
 ちんちん十次の内のかのり  
 相乃ちんちん月さゆりなり  
 門あつてあまらそねる而  
 ひらふと金そ 表久き  
 ちんちん女房のちんちん  
 又ちんちんちんちんちん  
 江戸の湯治をいふちんちん  
 ちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちん

芭蕉 此坡 芭蕉 此坡 芭蕉 此坡 芭蕉 此坡 芭蕉 此坡 芭蕉 此坡 芭蕉 此坡 芭蕉 此坡

あなごしち一花のふきつら  
未を乃のふのそとてあま月  
僕くもあまのあまのあまのあま  
厚風のほよ見いりくきり

此坡  
芭蕉  
此坡  
芭蕉

三吟

兼好も蓮歌うけり花さう  
あまのあまのあまのあまのあま  
行乃のあま乃小坂のうさまう  
外とさまよくみ園にお櫻場  
細くと朝日あまのあまのあま  
早稲も晚稲もあまにわ

此雪  
利生  
此坡  
此坡  
利牛  
此坡

下ノ三

はなごしち一花のふきつら  
あまのあまのあまのあまのあま  
僕くもあまのあまのあまのあま  
厚風のほよ見いりくきり  
兼好も蓮歌うけり花さう  
あまのあまのあまのあまのあま  
行乃のあま乃小坂のうさまう  
外とさまよくみ園にお櫻場  
細くと朝日あまのあまのあま  
早稲も晚稲もあまにわ

此雪  
利牛  
此坡  
利牛  
此坡  
利牛  
此坡  
利牛  
此坡  
利牛  
此坡  
利牛  
此坡

夜更のくろく文頼の事  
 地揚り又云 小便をす  
 くらりくらり内の子物送す  
 心下りぬ 著者のせんさ  
 婿の子を路り世に成るけり  
 あくくのくまの ちもくもくぬ  
 金佛乃細き山をさす  
 けくくく乃 ちきくま  
 森乃種々疎く風は吹倒れ  
 三場乃喧嘩乃 歸す正月  
 芥のくまの けくくく  
 今ふ片をのくちハハハ

炭者 利牛 炭者 利牛 炭者 利牛 炭者 利牛 炭者 利牛 炭者 利牛

下ノ四

夢はくくくつて負せりたる  
 けくくくくくとちおけあり  
 鎌倉乃使さるるをくらり  
 けくく折る ちまの 細川  
 けくく母をさるるをくらり  
 牛のくまの 正月の保

炭者 利牛 炭者 利牛 炭者 利牛 炭者 利牛 炭者 利牛

婦の川をさるる

望月のたさだまのるる  
 昼のあけりたるの鎌川  
 上江を通さぬとの雨あり  
 けくくとのそけハ雨のさるる

炭者 利牛 炭者 利牛

孤屋



夕月のつらふ 合せたる千如  
 もしくのりあてゝあかき 影  
 ありそらハ 宿の通るも下は  
 心の根 際を 鏡うさるやう  
 よこ 照ふそらしく 風乃 吹か  
 晒のよき 月さう 時 ね  
 花思やと 女もさうりう ぼれを  
 余乃くさかす 草いんわ

芭蕉 孤不 利牛 心水 孤不 利牛 芭蕉 侍水

百韻

西の探いハてきて 果てぬ  
 君のいさしの 真白ふさく

利牛 孤不

下ノ六

西のつら 珠散る地の時ゆて  
 よ力町より びふ 西う勢  
 竿竹の 志を乃 ぼくくうよせ  
 ころ 影をそく かく 人様  
 暮の月 下葉ハ 枯け 多き  
 揮ハ跡 多 檀 ちねあり  
 ぢりきり 中ふよう ぼれさるわ  
 坊さふ なきと やまう 仁平次  
 松坂や 矢川へ ぶらうり 通う  
 吹く 睡も ぼくふ 国共 故  
 十二三 共の 志を乃 赤さうい  
 本堂と した 暮ハとくく

孤不 利牛 孤不 利牛 芭蕉 侍水 孤不 利牛 芭蕉 侍水



日乃あたる方ハあつて山竹の  
 以身兼ふふ口もくく  
 近江崎乃くくも初まき初  
 天気の相よこ月乃照  
 牛あつてあふ弁はひいと僕  
 様乃実あつてあ根をくく  
 昔あつてあつてあつてあ  
 出れ世あつてあつてあつて  
 わくくと二思あつてあつて  
 ほろくあつてあつてあつて  
 かなあつてあつてあつてあ  
 年あつてあつてあつてあ

孤 利 世 利 孤 利 孤 利 孤 利 孤  
 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛

下ノ七

尚まあつてあつてあつてあ  
 切境の喰例くくくくくく  
 くくくくくくくくくくく  
 癩目せまきくくくくくく  
 後てきくくくくくくくく  
 けはあつてあつてあつてあ  
 くるくのあつてあつてあ  
 今月乃横くくくくくく  
 すのあつてあつてあつてあ  
 戸てあつてあつてあつてあ

孤 利 世 利 孤 利 孤 利 孤 利 孤  
 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛

代達は船と槍はすれぬて  
 赤い小窓のわらわらしき内  
 裳まてハ宿の男の姿をのぞ  
 師もは左尼の魂乃中より  
 旗插白の年一買りて  
 了満の状を又衣色けり  
 度神をうかひらるる船の肩  
 ひく起りて糸を觀き  
 燃ちるる糸を尻束ねて  
 十人入夫のちりまりしき  
 月夜にかけし城の跡を  
 弦赤丸 海雲 箱

孤香 利牛 孤公 利牛 地坡 孤屋 利午 孤公 利午 孤公 孤公 孤公

下八

二機嫌はかたさ度之机りて  
 小登れあらは空 群たり  
 極さしし腹を空をさし切て  
 稿乃殘り身を念入て見く  
 麦畑乃野原にほる清な枝  
 葉くさくさたる 形改の筆  
 物毎も子持かきささるる不  
 又ハ局外 古き いま  
 改まるる人かきささるる  
 夕のけんや一寂しきり  
 暮るる乃ちあふれ初は海  
 一つくさるる 箱

孤香 利牛 孤公 利牛 地坡 孤屋 利午 孤公 利午 孤公 孤公 孤公

錦さへふ茶のりある物さ月  
 かりたまはるる。雲乃堀は  
 云々を纏てふ程ふ時なる野の交  
 又さの〜して美徳さうり句く  
 かきけし仲乃己の月をまうと  
 入るる人か味ゆををを  
 さうりふふ本橋拾乃ち田所  
 山葉金乃見ゆ。宿乃見つま  
 りさ〜とさ〜とほ〜とをさ  
 若葉より感ま〜。想汁  
 花の内打越へ花。花系  
 尾野のほるは。月写よく

飛 利 孤 利 孤 利 孤 利 孤 利 飛  
 坡 牛 公 牛 牛 牛 牛 牛 牛 坡 坡

下ノ九

ちちのりも〜月乃雨の言  
 入東の〜月の 六月  
 杖ま〜たよの交居の〜  
 尚ははらる 月〜かひ  
 大ののあけ〜知り砂の〜  
 何年〜書信あまぬ抄のま  
 交金〜弓同公のあ〜  
 旭九十白 雲〜  
 程赤も〜ま〜ま〜  
 甲〜の〜頭〜  
 ち〜の〜の〜

飛 利 孤 利 孤 利 孤 利 孤 利 飛  
 坡 牛 公 牛 牛 牛 牛 牛 牛 坡 坡

丸かゝる 節月志木の 寝る  
 くらゐ 留る 八才乃 々々  
 丁寧不 他志 俵の 口々  
 絶 泣る 候々 去る 候々  
 夕月 志木の 只志の 候々  
 色て 候々 難の やきも 候  
 定て 候々 主の 候々  
 のと 候々 候々 候々  
 男 志木の 候々 候々  
 幾月 候々 候々 候々  
 城も 候々 候々 候々  
 門 候々 候々 候々

利牛 孤 利牛 利牛 利牛 利牛 利牛 利牛 利牛 利牛

下ノ十

彼 候々 一 主乃 候々  
 二人 候々 候々 候々

我 候々 孤 筆

春之郎 巻之

立 春

遠 候々 候々 候々 候々  
 春 候々 候々 候々 候々  
 刀 候々 候々 候々 候々  
 候々 候々 候々 候々  
 候々 候々 候々 候々

芭蕉 溜子 杉 瓜 去 来 西 堂 山

猶もききし門徒坊さのあはれの  
目しるも申乃 洞や幸片 財官  
初日彩と赤きまきこつまふとや  
平床より 観史久名をゆるる山考ふ

梅

毒一はつもく草乃 徳の所  
むら寝や 白の枕女のよき徳より  
むらぬ 夢の筋入まきよ初日  
寒のつちを 見たまめて

此のちもや 糸を光の目乃 白の  
梅咲く 湯張の 眠れ方を  
赤みその 目を 明くむかふ花

沿圃 孤石 利牛 地波

毒占 曲意 支老

土芳 利牛 游刀

下十

みかへ 小窓をうらねと 毒の花  
紅番の 娘をよめる 妻戸の 花  
むらぬも 老の 白く 夢より  
七んきや 寝ひあうけて 切き  
うちむらぬそ 夢を 橋ゆふ 経ゆ  
洛りの 文の たいら  
賦月一 望はく 木こ 夢より  
大さくや 繁乃 因て 夢月  
おむら 月まき 夢を 夢ゆふ  
汝川乃 命なり  
まの 夢を 夢より 夢ゆふ

地波 杉八

其 夢 仙 心

太 夢 文 仙 信

利牛

十八日之月 晴月の古の賣  
橋の恵初ゆふの晴をよむ  
福のふくまふくつたつた  
雲

くひのまふやうの身まふの  
雲ふ葉かへん輝の文  
くひのまのまふ起の  
雲や 門のまふ、夏宿堂  
雲ふひまの 一まふ金を  
柳

あつちのまふへつた柳  
陸子へー月のまふの  
雲

賣之乃

其角

其角

桃磯

利牛

柳春

系松

下十二

又人のまふてまふの  
廿二日之月 晴月の古の賣  
町の人まふの 宿の柳の  
雲ふ柳のまふの 柳のま

之とまふのまふの  
枝まふのまふのまふの  
会ふまふのまふのまふの  
橋ふまふのまふのまふの  
島乃まふのまふのまふの  
たまふ柳のまふのまふの  
柳のま

柳春

利牛

芭蕉

孤云

曲字

支考

柳春

柳

久しうたはたかたきまらるるかたへん  
 暮きまらるるかたへん  
 たふらるるかたへん  
 西あまらるるかたへん  
 ちかちか肉ては目あたらふ  
 うらうらあまらるるかたへん  
 ちかちかあまらるるかたへん  
 中かちかあまらるるかたへん  
 はあまらるるかたへん  
 おあまらるるかたへん  
 ちかちかあまらるるかたへん  
 たふらるるかたへん

色茶  
 杉風  
 文草  
 素花  
 孤屋  
 新  
 斜嶺

下ノ十三

柿乃昔昔はさし  
 牡丹さへ入る  
 ちかちかあまらるるかたへん  
 ちかちかあまらるるかたへん  
 ちかちかあまらるるかたへん  
 ちかちかあまらるるかたへん  
 ちかちかあまらるるかたへん  
 ちかちかあまらるるかたへん  
 ちかちかあまらるるかたへん  
 ちかちかあまらるるかたへん  
 ちかちかあまらるるかたへん  
 ちかちかあまらるるかたへん

小枝  
 其角  
 岸  
 智月  
 色  
 佑甫  
 全  
 利牛  
 全  
 孤屋  
 世

今更の時よまらるるや心楼 全

上巳

昔の川乃なるは改て  
登船本末なるの桃花  
かつまの杯をのりて  
鬼のよみ降るまじき  
月ま路をくまらるる  
麻の種毎事出づる  
菽恒やこころをく  
昔柳乃流るる

野

既ほ今あはれ

古棟 桃角 其角 如行 此坡 利牛 孤屋 色菴 考有

丁、十四

まゝ雨や増の葉つゝ  
長びつば一の葉や二と本  
ほそくとあみ焼門を  
鳥乃乃やけの櫻や田乃末  
花おきまのま乃

藤乃

は皮場を垣より

此葉のまの

いふ

重なるを  
毒さるる  
たよるる

芭蕉 子珊 如注 菴錘 仙華 時坡 利牛 楚常



橋のたつたのちりりきり  
 花のさきさきとくさくさ  
 雨はあつてあつとせり  
 中へふふ花のつよき  
 舟のまじりまじりのちり  
 花のさきさきとくさくさ  
 雨はあつてあつとせり  
 中へふふ花のつよき  
 舟のまじりまじりのちり  
 花のさきさきとくさくさ  
 雨はあつてあつとせり  
 中へふふ花のつよき  
 舟のまじりまじりのちり

可 奥 孤 景 浮 柳 芭 北 芝 字 元  
 廻 川 舟 洗 葉 門 蕉 枝 常 路 之

夏部きり

音夏

花のさきさきとくさくさ  
 雨はあつてあつとせり  
 中へふふ花のつよき  
 舟のまじりまじりのちり  
 花のさきさきとくさくさ  
 雨はあつてあつとせり  
 中へふふ花のつよき  
 舟のまじりまじりのちり

出 世 九 子 利 芭 太  
 野 波 翁 珊 牛 蕉 来

知つたあし 若毛乃の若細  
知のとあし ねあつちあつちあ

許六  
支考

題あし

棹り次とあしあしあしあし  
髪室底 此不蓮りあしあし  
うらあしあしあしあしあし

柳吉  
素堂  
芭蕉

那公

あしあしあしあしあしあし  
帰あしあしあしあしあしあし  
行蛇を月乃あしあしあしあし  
桃灯乃空あしあしあしあし  
本うくしてあしあしあしあし

桃徳  
其角  
茂雪  
松凡  
芭蕉

下十六

あしあしあしあしあしあし  
あしあしあしあしあしあし  
あしあしあしあしあしあし  
あしあしあしあしあしあし

素堂  
利牛  
此坡

麦

拵寺に麦穂のやあしあし  
麦の穂あしあしあしあしあし  
あしあしあしあしあしあし  
あしあしあしあしあしあし  
あしあしあしあしあしあし

荆口  
千川  
許六  
利牛

あしあしあしあしあしあし

麦穂のあしあしあしあしあし

此坡

あしあしあしあしあしあし

浦風やむらさき 堀りたるえき

谷水

端午

入る雨や傘を付る少女形

其角 酒堂

さし入るやみちをまらるる風のま

りしやまてちをまらるる風のま

又もなかくはまらるる 糍入把

ままのちの首の骨を甲がね

怪より下ぬきまらるる 捨るね

仙花 素花

夏夜

多松をみみりて町にあらる

卧高

枯木を登るはつー旦のまら

斜嶺

二二三の野をみみりて町にあら

魯町

下十七

たげの空力なるあつては  
終の路やたまたまのまらるる

猿往 芭蕉

はかたは雨の侵す

五月雨

さみしねやとまらるる 九本松

りし雨やらるるやよ川 大和川

さし入る小舟をまらるる 舟

りし雨やまらるるのまらるる 菖蒲

りし雨やまらるるのまらるる 菖蒲

りし雨やまらるるのまらるる 菖蒲

芭蕉 水

涼

川中より根をよとらるる涼

芭蕉

月報よりくく夏あやめあめあや  
 涼きよ輝ふまらるる竹方枝  
 紅燈を志のそとらるる遠く  
 信風はすくく涼一か信の安  
 すくくあきと秋のそとら  
 すくくあや浮洲舟しつら  
 夕きくあやあやあやあやあや  
 三日月の湯とすすいさくぬ

女  
 の  
 有  
 灯  
 七  
 探  
 芝  
 留  
 月  
 九  
 峯  
 去  
 来  
 世  
 坡  
 素  
 堂  
 杉  
 風  
 正  
 秀  
 里  
 東

下ノ十八

多し女ふくくくくく 菜崎介  
 本美あや  
 山吹も巴も出る 田植うね  
 ひらひらあやあやあやあやあや  
 せんせんあやあやあやあやあや  
 晚のりあやあやあやあやあや  
 雨乞のあやあやあやあやあや  
 堂〜一雨のうらやあ 葵  
 一〜あやあやあやあやあやあや  
 かりからあやあやあやあやあや  
 猪乃牙小のけりあやあやあや  
 周美は町のあやあやあや

嵐雪  
 許六  
 智月  
 北観  
 乙州  
 大艸  
 仙花  
 楚舟  
 残香  
 芬  
 怒爪

けりしもみ入籠の柄や申大器  
一披らすけさき竹のこし  
竹のみやりの葉をよしの  
かしの入備り酒をよしの  
城のよしの葉をよしの  
かしの入備り酒をよしの  
けりしもみ入籠  
改て酒をよしの  
あいの別葉をよしの  
かしの入備り酒をよしの  
けりしもみ入籠

祐甫  
仙花  
嵐雪

利牛

世世

下十九

秋之部  
各月

秋のしづかなさの  
月を述べて其のなまさを

名月や見れば多も居お取  
名々の極をよしの秋の  
家室のよしの月を  
名々の洋吹葉の森乃  
秋夜や舟船揚よしの月見  
ゆちりの樹乃ひきよけの月  
家室のよしの月を  
ひきの中秋の月を  
聖峯不盡坑皮と  
明るやふも二見ゆるく

似ま  
去来  
荷不  
西堂  
里東  
利牛  
其角  
素靴

七夕

世の葉も枕付てわろしきへ  
里合ふのえまきやわかの塚  
七夕やうらうらたる天の川

其角  
孤を  
嵐雪

孟茶孟

こしきひよかひらふわやぶか  
踊る人きかしく舞くまは月  
まは月流るる門をたきまら

酒堂  
李白  
北波

桐魚

岡岡

桐うわやまふげあふにいのね  
ねうらや日傭出たわねんね

芭蕉  
利合

下北

くわあつとねあつとね 柳舟

柳春

秋虫

年よれは輝もろるを成りくも  
悔りよ人のとまねわきうらうら  
端路中へくんで落るるあつとね  
うらうらや若く退るる様の上

智月  
大艸  
孤有  
孤を

鹿

友麻の啼を見うらう山鹿介

車来

人ののこころようら

森乃あひ跡や洞なり新垣の

素乳

結行のうら

まのあやすまふまき鹿の毛

土芳



世をくらしむる事あるの事  
の世をくらしむる事あるの事  
の世をくらしむる事あるの事  
の世をくらしむる事あるの事  
の世をくらしむる事あるの事  
の世をくらしむる事あるの事  
の世をくらしむる事あるの事  
の世をくらしむる事あるの事  
の世をくらしむる事あるの事  
の世をくらしむる事あるの事

あつた一箇の事あるの事  
あつた一箇の事あるの事  
あつた一箇の事あるの事  
あつた一箇の事あるの事  
あつた一箇の事あるの事  
あつた一箇の事あるの事  
あつた一箇の事あるの事  
あつた一箇の事あるの事  
あつた一箇の事あるの事  
あつた一箇の事あるの事

石をを捨てし根をばも  
石をを捨てし根をばも  
石をを捨てし根をばも  
石をを捨てし根をばも  
石をを捨てし根をばも  
石をを捨てし根をばも  
石をを捨てし根をばも  
石をを捨てし根をばも  
石をを捨てし根をばも  
石をを捨てし根をばも

荷分  
文軒  
庭壁  
嵐雪



草花名考 草花も思ひ持て  
夕白乃けし秋あつ 秋草  
くすけし風もくすくすなるけり  
ゆき風も吹くやあつた池のよ  
店丁乃けし神さし 月の雲  
冬之部

利合  
支考  
北枝  
依く  
其角

初冬

風や沖より吹く  
市井や木は葉も落し  
冬枯乃けし  
楼店や風張る  
鮎の果乃けし

其角  
桃僊  
芭蕉  
支深  
斜嶺

下ノ六三

刈菖蒲の跡のまゝ  
風乃けし  
初冬や  
風や  
南宮山

桐実  
残香  
楚舟  
八桑

本枯乃  
筆目よ  
時雨

桃僊  
遊力

草花名考  
黒きけり  
昔葉の霜  
ゆきぬ

荊口  
支州  
斜嶺

在明とかなれぬ後くしぬは

旅ねのあら

わね飛流とまうの白の波やぬ

大根汁といふりま

鞍鹿のしん坊をきくや大根汁

餅まいたをきくや大根汁

外遠り流るる一宵の云大根

さむさをり乃のさむさを

人替りのおれは送るさむさを

あのびん先族投りさむさを

昔も切る切る物もなまむさを

許六

地波

芭蕉

酒堂

飛檝

示地

下ノ九四

足の手もあしけて申しやの月  
魚止や送るちとてあは月

右の二角の川のさくさくは比

他はさうの状のさくさくは比

今もさくさくは比

雪

さうさくさくは比

初まらぬ見のさくさくは比

さうさくさくは比

さうさくさくは比

さうさくさくは比

その秋もさくさくは比

秋眉  
里東

典波  
利牛  
買山  
依之  
猿鱧

杉のたかきさかすけのたか  
朱の鶴や流世へまゝの宿の宿  
とろろや先ころやまゝ宿を  
家来の横町さるる ちか  
海の中もくさくさ ちか  
のり魚や曲突ふまゝ雪の雪

題不

あきしきまゆめおしほの極楽  
まじりや粉糰乃のり 白の雪  
禅門の草屋宿おろし十夜  
山火焼のまきおろしな村の  
白うとのあつま白のや 杉の雪

支考  
小枝  
洋六  
柳夕  
乙州  
素お

望天

呂丸  
芭蕉  
洋六  
智月  
之送

下北

檜のたかきさかすけのたか  
実申やとくふ巨徳のゆめ  
作と作る縁組さんてさ  
海へ縁起や 今より 彼の

たかき

焼くは己の棚つる大工の  
焼柿せうしをたかくは代  
深つきや へばきさるるま  
山外乃見ろくおし師を  
侍もや あふまゝちり

歳暮

あつまのたかきさかすけのたか

文甲  
残香  
其角  
全

芭蕉  
万平  
唯波  
片雪  
智月

杉凡

ちうゆまきぬ算入るあつちの考  
 ちうゆまきぬ考一羽とかなれ  
 鶴あつちけちりしきよ年乃考  
 ちうのちん算しちうは後  
 年乃くまふふふきつち  
 世其ちうのみりちのひせ  
 ちうがちんきんちのひせ  
 爪ちて心ちちやまふちり  
 ちう手よまふちんちひち

季由  
 智月  
 孤否  
 猿終  
 世故  
 素心  
 的ま

袞階秋々部

下ノ世六

秋の空毛上のちよまふれちり  
 ちよまふれ一羽海つち考  
 ちよまふれ日傭考了 国考  
 月の陽考 四麻乃 門  
 祖父の母の公柄も考  
 ちよまふれちん丸太とちん丸  
 下京のちん信の考  
 ちよまふれちん考  
 ちよまふれちん考  
 息吹久の考  
 田の野り早苗把て考  
 乃者乃とまふれ 編笠の考

其角  
 孤否  
 全  
 其角  
 全  
 孤否  
 全  
 其角  
 孤否  
 其角  
 孤否  
 其角  
 其角

仍燈のりしゆーさるにそしあ  
那よあさそさうね乃月  
珍風小艇のさるにひさし  
序乃下さる 茂わさる  
書之の梅ほ桂乃たのち  
ひさのふありあのそをそ  
いさか 臨をさき金乃ほひ乃  
官の序乃ひさしーさき内  
交序書おさうささるそ  
ひさことさ入小借りさる  
年乃豆窓棋乃ひさし  
常とささるさあ凡書ささ

孤 其角 孤 其角 孤 其角 全 其角 孤 其角 孤 其角 孤 其角 孤 其角

下ノル

天野氏尊乃  
天野氏尊乃  
今四百歳頃とて吟仰了

天野氏尊乃

其角 孤 其角 孤 其角 孤 其角 孤 其角 孤 其角 孤 其角 孤 其角

乃こり拾ひつりて集る  
とんちみちたふる 柱の  
八月の夜にしののけと赤明て  
堀の外まで 桐乃のつら  
酒壺よりなるぬれつてつる  
はよふ時ふる 雨乃つら  
此の夜にさうさうましかる  
近々ふる居るとさうさうましかる  
年よりさうさうましかる  
つらよりさうさうましかる  
さ折けのさうさうましかる  
かまかふさ 嫁乃は合

桃隣  
此坂  
利牛  
桃嶺  
利牛  
此坂  
利牛  
桃嶺  
利牛  
此坂  
利牛

下凡八

とんちみちたふる  
鎌持より ぬれつてつる  
時たふに合伴する  
時たふに合伴する  
人乃物尋ねて 集る  
ゆゑに 延きつる  
より平の機ふ少痛む  
むらさきまこころれり  
買ひて 年より 集る  
得るけさうさうましかる  
はよふのさうさうましかる  
夜のはよふ月かへく

桃嶺  
此坂  
利牛  
桃嶺  
利牛  
此坂  
利牛  
桃嶺  
利牛  
此坂  
利牛

月より者乃物...  
 又また...  
 名 高六郎別室...  
 焼物...  
 先仲...  
 内て...  
 ち...

桃隣  
 利牛  
 桃隣  
 利牛  
 桃隣  
 利牛  
 桃隣  
 利牛  
 桃隣

下九

秋七月廿月海川...

振賣の...  
 青通...  
 好物...  
 利牛...  
 孤...  
 芭蕉...  
 利牛...  
 孤...  
 芭蕉...  
 利牛...  
 孤...

芭蕉  
 利牛  
 孤  
 芭蕉  
 利牛  
 孤  
 芭蕉  
 利牛  
 孤

肩解ふさ湯盆の膏原  
 上まきの干の葉刈りむらひの穴  
 下ふせ貝貝 肉てきする  
 飯堂の七ささうを音うた  
 堀ふ門あふみ 十石を  
 山崎の隊屋の是橋月を  
 砂不暖のうらひ 昔年  
 新田のうらひ 昔年  
 吹しむらむら 昔年  
 川越乃帯一のあをいあ  
 平地の帯のうらひ 昔年  
 干物を日向日方入る昔年

利牛 芭蕉 利牛 芭蕉 利牛 芭蕉 利牛 芭蕉 利牛 芭蕉 利牛 芭蕉

下ノ三十

松尾の鴨乃 昔年  
 笠原の波世を 昔年  
 又 沙汰あり 昔年  
 ささくさく 大晦日 昔年  
 昔年 昔年 昔年  
 中より 昔年 昔年  
 昔年 昔年 昔年  
 昔年 昔年 昔年  
 昔年 昔年 昔年  
 昔年 昔年 昔年  
 昔年 昔年 昔年  
 昔年 昔年 昔年  
 昔年 昔年 昔年  
 昔年 昔年 昔年  
 昔年 昔年 昔年

利牛 芭蕉 利牛 芭蕉 利牛 芭蕉 利牛 芭蕉 利牛 芭蕉 利牛 芭蕉



梅屋のちりやうらまき風

利牛

雪より雪あまほみれの梅屋し  
日乃ゆきま入乃老まきを先  
下老を一本深よお明を  
あつこまきくた各乃り位  
月よあつら風あつらり秋  
雲をあつらまそひらき 富地  
の終あつら悦まねり 花あつら  
第あつら〜りく 舞あつら  
二と老 梅屋のぬ門の扱  
る乃梅屋物のとら 干もた

利牛  
孤玉  
芭塗  
子冊  
把漢  
利牛  
岱水  
子冊  
子冊  
占圖

下三十一

竹やぶのちりやうらまき風  
梅屋のちりやうらまき風  
よあ者乃一人の風ぬ浦の秋  
あつら風の 老まき 雲を  
春くの月まきまを 梅屋工  
春中へのり 梅屋をうらゆる  
あつら風のまきつらよあつら  
川うらまきふ小然りつら  
お梅うらまきつら梅まき梅まき  
梅屋へまきつら山へりあつら  
梅屋のちりやうらまき風  
老まきつら 梅まきつら梅まき

石葉  
杉風  
井坡  
利合  
依漢  
桃漢  
子冊  
石葉  
杉風  
岱水  
孤玉  
老良

隣舟を橋を依へたり  
こもくつをてし並代の禮  
きくゆをかくつと自體あぢ  
きりくわて火をくつてあ  
又けきも併の合を 傍を明  
換さうて 賢と 如き  
大坂志人あすれらるるお月  
酒をとまればと 祖母の気入  
とりのぬる出衆の給のさし  
次乃小部屋で けふむせ  
物本ありみて 居るはあぢ  
古乃 うねが ぬるあぢ

桃 隣  
依 く  
佑 圃  
子 冊  
利 牛  
利 合  
利 放  
子 冊  
利 牛  
多 良  
松 舟

下三十三

飛乃雨あそぶ内家御  
男より小遊 とうゆ  
春水満四澤のたぎ  
川柳水もとうる柴葉  
ま柳のぬれ身へあう染つ  
川城く 幸のたあを 柳く  
派電ふ人たり けふ  
ま柳く さいふ 柳く  
るあこ 下ろ 柳く  
ま柳く 吹玉さねり 柳く  
つゝある 風ふらふ 柳く  
草先や 遊を 柳のむら

桃 炭  
岱 水  
山 店  
嵐 竹  
岱 水  
可 長  
史 邦  
里 倫  
去 来  
白 良  
史 邦

芳野

花さくろく山の白くろけ物めけけ  
 枝のくさるるをけけりくろ物名を  
 花さくろくくさるる花のあおの山  
 しろくろくや木のきくろ物名を  
 しろくろくかおのくろ物名を  
 若くろくま衛門様の花見くろ物

三月盡

芭蕉 山店 去来 洞木 芭蕉 山店  
 山店 史和 嵐竹

下三十三

阿彌野

尾陽邊に糧を食主人けけりくろ物名を  
 花さくろくくさるる花のあおの山  
 しろくろくや木のきくろ物名を  
 しろくろくかおのくろ物名を  
 若くろくま衛門様の花見くろ物  
 花さくろく山の白くろけ物めけけ  
 枝のくさるるをけけりくろ物名を  
 花さくろくくさるる花のあおの山  
 しろくろくや木のきくろ物名を  
 しろくろくかおのくろ物名を  
 若くろくま衛門様の花見くろ物

元禄二年秋生

芭蕉親書

花三十一句

よひのあや

あまのついでとてなつたあまの山  
我もあまのついでとてなつたあまの山  
あまのついでとてなつたあまの山  
あまのついでとてなつたあまの山  
あまのついでとてなつたあまの山  
あまのついでとてなつたあまの山  
あまのついでとてなつたあまの山  
あまのついでとてなつたあまの山  
あまのついでとてなつたあまの山  
あまのついでとてなつたあまの山

貞室 路通 信極 晨凡 友五 尚白 去来 野水 龜羽 越人

下三十四

あまのついでとてなつたあまの山  
あまのついでとてなつたあまの山  
あまのついでとてなつたあまの山  
あまのついでとてなつたあまの山  
あまのついでとてなつたあまの山  
あまのついでとてなつたあまの山  
あまのついでとてなつたあまの山  
あまのついでとてなつたあまの山  
あまのついでとてなつたあまの山  
あまのついでとてなつたあまの山

一井 俊以 嵐草 舟泉 胡及 長缸 卜枝 鳩歩 荷兮 今下 落芝 丸つ

心苗  
 我人  
 我あ  
 冬松  
 冬文  
 荷兮  
 芭蕉  
 全

下三十五

季吟  
 素堂  
 為雪  
 城人  
 松下  
 金又  
 柳凡  
 嵐溪  
 一花  
 全

後編

ほくそ果れ十日もと名も花散  
咲きもや森入るぬきのかき  
ゆふなりや今たてきく時き  
くふのや力うまほほほまき  
くま馬よまう合けりわきま  
たか明乃月まおれまきうか  
まきまきまきまきまきまき  
うりうりまきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまき

月三十一日  
おろくまきまきまきまき

梅舌 市山 季桃 智月 鈍可 全下 杏雨 風泉

おれくも月君の中の時な  
月ひらつたのうまの今雪  
雨の月まきまきの花  
けうまきまきまきまき  
まきまきの雪まきまきの  
おろけまきまきまき  
まきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまき

満水 一雪 坂人 昌碧 市柳 一髮 長虹 任他 亀洞 城人 文鱗 昌彦

多しやとさしそわくも草中  
名月平敷乃考と犬の舌  
見よものとおわくて人の月を分

名月の心のこころ

ひらりと月を見つる月夜  
の月の月も 露をうすれて  
名月平敷もおもひをいふ  
名月やちかとおかしく  
名月のあやまきしこぬ林かな  
宵に見て 橋をのりや  
十三夜 新ふと秋ふぬ程見よ月夜  
朔日 暮るる月のもたぬ

今下  
二水  
北あ

荷分  
全  
公来  
胡及  
為方  
一髪  
松風  
荷分

下三十七

二日 見よ人もあまき 月の夕川  
三日 夕月の夕とそわく 似て三日の月  
四日 夕月秋の夕とそわく 夕月の月  
五日 夕月の夕とそわく 夕月の月  
六日 根川 見よ人もあまき 夕月の月  
七日 夕月の夕とそわく 夕月の月

雪二十

左

雪乃月や船の夕とそわく  
の夕月の夕とそわく  
竹の夕月の夕とそわく  
夕月の夕とそわく

全  
芭菴  
下枝  
一泉  
雀声  
一髪  
京  
其角  
芭菴  
塵交  
加生

車及雪をまきかすはあゝと云ふ  
 去る雪風国をくゞ 腹をほたけり  
 去る雪風戸咽ぬ笛を奏庵ハ  
 めりけのふとぬも雪の詠人ハ  
 へきあふ物陰見たり雪の隈  
 雪降くゝと雪よとあゝ雪うね  
 秋の雪をねまぬ雪ふ枝枯人  
 雪の目や川筋をうゝ雪くと  
 初雪をねりし雪きる雪の雪雪  
 雪の雪の大雪よりハ 中雪より  
 雪はねれり雪舞り雪の雪雪  
 雪乃暮れ雪けり雪の雪

小春  
 城人  
 尾幸  
 松芳  
 二水  
 鬼仙  
 除風  
 除風  
 今下  
 芳川  
 冬文  
 桂夕

下三十八

ちりくね 雪の雪 酒法版  
 去る雪風先草屋を雪雪  
 雪の雪 雪の雪 雪の雪  
 船をけり雪の雪 雪の雪  
 歳旦  
 二回もぬる雪の雪  
 雪の雪 雪の雪 雪の雪  
 雪の雪 雪の雪 雪の雪  
 雪の雪 雪の雪 雪の雪  
 雪の雪 雪の雪 雪の雪  
 雪の雪 雪の雪 雪の雪

荷雪  
 路通  
 飛鳥  
 芳川  
 芭蕉  
 古楚  
 其角  
 文麟  
 本来  
 一品



えねわ何となくねとまされふ  
え良ハ咽きあしるかすし  
齒園り梅のたつむ自の  
あら社老まハくねとひま  
あまをさうちうけて良ま方梅  
伊勢浦や山並川休むをねま  
あままの名をつけて思ひ家  
本年のまらひさうー。年  
小林子葉やひるまひまの  
あー男ふ枝葉をさひけり  
ふ葉まうー自まら電  
松まらー引まら年

一路通  
一 笑  
如行  
松  
梅  
同  
昌碧  
元廣  
舟泉  
全  
重五  
釣雪

下三十九

月たろ初と望月のはあしう  
連まはてふあまらり万葉  
うー白まららるのま  
見むをさひまらり年の  
そねと起て思まらー柳ハ  
ま不雅やあまの面らり  
ま達茶や舟の区のねま  
佛よりねまららるま  
のー官名やらあめら  
あまらあたらあまらら  
五月の葉のからまら  
まの春寂ーあまら

一井  
胡及  
長虹  
嵐  
全  
湍水  
と  
朴什  
冬文  
今下  
冬松

大坂のまき年乃青葉の白ひ  
 雪の女空まの星一年おとと  
 年一山嵐おあからりりり 又方柳  
 御もくを松の葉ちまるをねま  
 だそく見正もねるうう大わみ  
 響くまきり 初やたうふくら  
 初もあや 演各乃柳の今のま  
 とらこまのわてんた名まうはる  
 ありやあふ 山踏ふまのまは  
 万歳まをを 護ふ明よけ  
 己のちもせし せま乃ねあま

柳風  
 防川  
 昌勝  
 夕乃  
 梅舌  
 此も  
 全  
 全  
 荷子  
 全  
 全  
 全

下四十

手あま 用ふま みるま  
 我は武、宮中も ちもを  
 初ま

借  
 散齋  
 貞室

名はあつひめを 山吹初柳介  
 村中を 掃くも 見まを 柳介  
 七草を したたるま ぼよよ  
 女せく 露をうら ねるり 三草  
 例はく 後乃 ねり 又 破葉  
 吾うい のり せま ねま 葉  
 石物くつ やま ねり けり  
 有るま せお ねま 事乃 花  
 初まの ねり ねり ねり

柳人  
 世あ  
 俊似  
 小春  
 後維  
 奈秋  
 元寒  
 崎号  
 城人

散るしれりてふれん毒のた  
梅のそあつらひんを帯入  
暮るたもたのすけりてか  
みのりしを帯入る梅のそりか

梅 梧  
一 髪  
冬 松  
暮 笠

個々國の事

毒のたよるしれりてふれん毒のた  
梅のそあつらひんを帯入  
暮るたもたのすけりてか  
みのりしを帯入る梅のそりか

芭蕉  
若風  
去來  
相  
市柳  
夢

下ノ四十一

散るしれりてふれん毒のた  
梅のそあつらひんを帯入  
暮るたもたのすけりてか  
みのりしを帯入る梅のそりか

梅 梧  
一 髪  
冬 松  
暮 笠  
舟 泉  
今 下

樓水

散るしれりてふれん毒のた  
梅のそあつらひんを帯入  
暮るたもたのすけりてか  
みのりしを帯入る梅のそりか

今 下

全 齋 全 椿

曉の物籠よなごころつとたの  
慈徳く嬉しのぼり枝を  
こころ胸の舟なり 舟こそまろ  
まのぬきよとませ 咲くはま

向尾摩

とあまの鹿はまのる向尾  
銀の井ふまふのく ちりぬ  
まゆ不毛草見ゆる明を  
まよくと想よ懐けりけり  
まよくとつむやほのやま  
まよくと雲のよのきけり  
まよくとまよとふるけり

荷分  
ト枝  
湯水  
嵐

せの  
奇生  
舟泉  
其角  
芭蕉  
冷車

下ノ四十二

川舟や舟のへりつと  
咲く一頭中ふぬまのり

素堂は美波津をせせぬまのり

他不飛なり 假名をうみ 柳陰  
風の吹方せうらの 柳の舟  
舟の舟なり 舟の舟なり  
さし舟くまのり 舟の舟  
尺とさうまのり 舟の舟  
すれぬ舟の舟 舟の舟  
舟の舟を舟の舟 舟の舟  
舟の舟の舟の舟 舟の舟  
舟の舟の舟の舟 舟の舟

冬文  
青江

素堂  
舟人  
一笑  
小春  
一笑  
昌碧  
杏雨  
此橋

吹風小半のりこまむくちあまふ  
吹風よ春のこよふに 柳の  
風あふぬ月こまふの柳の  
舞うまき野雁居をさぬ柳の  
鈴鳴りしこま月柳の  
青柳のりて通る車あ  
引いさふ後あふあふり  
舞あふこまふりて柳の

仲春

杏雨 松遊 荷分 全 素秋 西岬 生林 不悔 長紅 今下

下四十三

其乃花形 眩ちのりか  
くくくくくくくくくく  
万歳をばあふりて  
つんつんつんつんつん  
あふりて一今絶  
あふりてあふりてあふりて  
あふりてあふりてあふりて  
あふりてあふりてあふりて  
あふりてあふりてあふりて  
あふりてあふりてあふりて  
あふりてあふりてあふりて

清河 去来 昌碧 城人 笑中 除凡 一松橋 一冬松 一除凡 除雪

乃のこを輪偶律て中を解ふは  
 身を解りて中の中なる性も  
 身も解りて中の中なる性も  
 あつて身を解りて中の中なる性も  
 いふまゝの骨折る者のうちりか  
 飛きて去りてあつて中の中なる性も  
 不圓を破くはるる性も  
 山の中なる性も  
 たる性を思の思ふはるる性も  
 機軸の思ふはるる性も  
 かたがたの中なる性も  
 思ふはるる性も

後車  
 家徳  
 養格  
 故人  
 去来  
 落梧  
 奈下  
 一井  
 柳凡  
 梅餌  
 吹玉  
 百樹

八十四

暮春

何の思ひはあつて中の中なる性も  
 稀かゝるとさういふ中の中なる性も  
 せうくく乃おつて中の中なる性も  
 多うくく乃おつて中の中なる性も  
 草刈て草刈りて中の中なる性も  
 仍據のさういふ中の中なる性も  
 麦畑の人見るとさういふ中の中なる性も  
 大けやあつて中の中なる性も  
 せうくく乃おつて中の中なる性も  
 空明よ山吹や中の中なる性も  
 山吹と蝶乃よさういふ中の中なる性も

忠知  
 荷子  
 舟泉  
 吟歩  
 焔遊  
 杜国  
 式之  
 芭蕉  
 世あ  
 卜枝

一 寄るを山吹のそくはくうる  
 ちとけりて山吹のそくはくうる  
 ちとけりて山吹のそくはくうる  
 ちとけりて山吹のそくはくうる  
 ちとけりて山吹のそくはくうる  
 ちとけりて山吹のそくはくうる  
 ちとけりて山吹のそくはくうる  
 ちとけりて山吹のそくはくうる  
 ちとけりて山吹のそくはくうる  
 ちとけりて山吹のそくはくうる  
 ちとけりて山吹のそくはくうる

峰 藤子  
 全 蓬雨  
 俊 似  
 長 之  
 長 虹  
 崩 彈  
 且 葉  
 茲 笠  
 城 人  
 今 下  
 友 直  
 三

下ノ早五

ちまゆふは花吹雪のそくはくうる  
 ちまゆふは花吹雪のそくはくうる  
 ちまゆふは花吹雪のそくはくうる  
 ちまゆふは花吹雪のそくはくうる  
 ちまゆふは花吹雪のそくはくうる  
 ちまゆふは花吹雪のそくはくうる  
 ちまゆふは花吹雪のそくはくうる  
 ちまゆふは花吹雪のそくはくうる  
 ちまゆふは花吹雪のそくはくうる  
 ちまゆふは花吹雪のそくはくうる

荷 子  
 兼 正  
 毎 四  
 卜 枝  
 即 有  
 全

初夏

ちまゆふは花吹雪のそくはくうる  
 ちまゆふは花吹雪のそくはくうる  
 ちまゆふは花吹雪のそくはくうる  
 ちまゆふは花吹雪のそくはくうる  
 ちまゆふは花吹雪のそくはくうる  
 ちまゆふは花吹雪のそくはくうる  
 ちまゆふは花吹雪のそくはくうる  
 ちまゆふは花吹雪のそくはくうる  
 ちまゆふは花吹雪のそくはくうる  
 ちまゆふは花吹雪のそくはくうる

路 通  
 今 下  
 崩 彈  
 貴 拙 老人のゆかぬいおひしゆら  
 番 下 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

とそちの物越へくちもせ忘れ  
くく咽つてその比文縁よすのしる  
弊くり焼きもあつていふ文

山路よそ

かろはまてもあつて葉の二つがな  
ひらたつたれとていふてん 杜の  
柳の本のさつとさつとさつとあつ  
切らふのりさあせ見れば構ふ  
若らまあつとさつとあつとあつと  
りりもかつとあつとあつとあつと  
ひらくことさつとあつとあつとあつと  
ゆらりりりりりりりりりりりりり

荷兮

芭蕉

井

不交

最

竹

鈍可

下ノ四六

たけのやうゆへあつては平本  
とてあつての種のてま一様  
枯るハままさつとあつとあつと  
変らうとて葉の本さつとあつとあつと  
むきういふさつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつとあつと  
自らあつとあつとあつとあつと  
けーあつとあつとあつとあつと  
大粒の雨さつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつとあつと  
海川乃庵あつと

多久  
玄察  
生林  
作不知  
鈍可  
嵐  
落梧  
李桃  
東巡  
吉次  
嵐雪



まのさかろくあはれをいかに

野水

仲夏

骨けりぬ 毎ふくくくく 骨くぬ  
刈草あつる ぬゆきくくく 外  
窓くくく 支障ふせのゆきくく 外  
園きよくくく すすきく 骨くぬ  
乃細く 遊むぬ 沢をぬく 骨  
あわ乃 ぬくくく ぬくくく 外  
草くくの 神くくく 骨くぬ 外  
あぬて 骨くく 神くく 骨くぬ 外  
まのさかろくあはれをいかに

舞

元補

一髪

不交

風笛

青紅

倉占

ト枝

鴉世

秋芳

下り

板のむれて 梅の一本の 羅くけり  
あつらふ 海ぬせぬ 骨くぬ 外  
雨のくく 傘ぬく 骨くぬ 外  
板の 癒て 澄の上よ 骨くぬ 外  
藤の 花さく 骨くぬ 外  
波に ぬく 骨くぬ 外  
空伸く 骨くぬ 外  
竹を ぬく 骨くぬ 外  
筆に 時く 骨くぬ 外  
竹を ぬく 骨くぬ 外  
あつらふ 骨くぬ 外

小春

李雨

二水

一笑

胡及

児竹

此橋

長虹

夫来

大我

一枕

尚白

ろくろ八分今たきかき両るん 龜洞

波阜にて 貞室

おりろくろきしきとろくろ持繩 芭蕉

かりろくろてやかくかき持舟 荷守

おき 荷守

持舟つら小舟もれれて傍なり 越人

おき 梅餅

持舟つら小舟もれれて傍なり 梅餅

おき 梅餅

鴨志堂兵衛 梅餅

下四十八

おき 越人

おき 越人

おき 越人

おき 越人

おき 越人

おき 越人

おき 越人

おき 越人

おき 越人

市柳

夕影のまを夕影のまに似てを

暮夏

柿もろこくやうなり 蝉のこえ  
夕影に干すゆり 恒徳  
さくさく 梅もやぬ 本注  
海さよ白雨なり 入目  
簾して海や宿のまのり口  
雲のぬき子 雨さくむなり  
たき庭乃かあつくぬ 筆  
松のりり人小あきり 又す  
ぬき乃石代や字乃しき  
海とや樓のふくくあのみ

長虹

昌碧

今下

去来

荷分

飛水

荷分

如凡

俊似

全

下四十九

桃灯舟 夕影のまに似てを  
まろこくやうなり 蝉のこえ  
夕影に干すゆり 恒徳  
さくさく 梅もやぬ 本注  
海さよ白雨なり 入目  
簾して海や宿のまのり口  
雲のぬき子 雨さくむなり  
たき庭乃かあつくぬ 筆  
松のりり人小あきり 又す  
ぬき乃石代や字乃しき  
海とや樓のふくくあのみ

ト枝 未堂 秀正 晨凡 占苑 芙蓉水 長虹 俊似 又精 濼月 尚白 一髮

虫のや 葉をさすの 様は  
麻の葉は 葉をさすの 様は  
初秋 素聖

ちんねん 麻の葉をさすの 様は  
楸の葉をさすの 様は  
越人 圓解

一葉の葉をさすの 様は  
ちんねん 麻の葉をさすの 様は  
杏花 方生

男の葉をさすの 様は  
お花の葉をさすの 様は  
芭蕉

下五下

葉や 樹をさすの 様は  
お花の葉をさすの 様は  
荷子 文鮮

お花の葉をさすの 様は  
樹をさすの 様は  
公 陸

お花の葉をさすの 様は  
樹をさすの 様は  
胡及 朮

お花の葉をさすの 様は  
樹をさすの 様は  
去来 朮

お花の葉をさすの 様は  
樹をさすの 様は  
素衣 一

ち乃雨六 後ほめ 後清きうか  
 ひまらまやまの かくあけハ西  
 あまれてもうせうらうやまのた  
 ひまらくと 後空けやや下ら花  
 相化るとく 後まのき 楠苗か  
 草ゆりく ぬらぬらなるぬら  
 めえまんと ぬらぬらなるぬら  
 行人や ぬらぬらなるぬら  
 金梅 法行 せまふらうて  
 茶もあぬぬらぬらなるぬら  
 ありく ぬらぬらなるぬら

仲秋

芭蕉 其角 舟泉 芭蕉  
 任作者不知 荷方 胡及 素堂 俊似

下ノ五十一

ち乃雨六 後ほめ 後清きうか  
 ひまらまやまの かくあけハ西  
 あまれてもうせうらうやまのた  
 ひまらくと 後空けやや下ら花  
 相化るとく 後まのき 楠苗か  
 草ゆりく ぬらぬらなるぬら  
 めえまんと ぬらぬらなるぬら  
 行人や ぬらぬらなるぬら  
 金梅 法行 せまふらうて  
 茶もあぬぬらぬらなるぬら  
 ありく ぬらぬらなるぬら

芭蕉 其角 舟泉 芭蕉  
 任作者不知 荷方 胡及 素堂 俊似  
 越水 林谷 東順 其角 重五 一泉 一髮 今下 益音 小春

つらう宿のこゝろをゆく秋のよき夢のね

宗和

つらう草子房のよき夢のね

初夢せむの夢をゆく秋のよき夢のね

北枝

まゝ夢をゆく

まゝの夢のねをゆく秋のよき夢のね

越人

一本の枝の夢のねをゆく秋のよき夢のね

防川

夢のねをゆく秋のよき夢のね

舟矢

夢のねをゆく秋のよき夢のね

胡及

夢のねをゆく秋のよき夢のね

曉臈

夢のねをゆく秋のよき夢のね

共角

夢のねをゆく秋のよき夢のね

共角

よき夢

つらう宿のこゝろをゆく秋のよき夢のね

芭蕉

暮秋

つらう草子房のよき夢のね

巴丈

つらう夢のねをゆく秋のよき夢のね

昌碧

つらう夢のねをゆく秋のよき夢のね

越人

つらう夢のねをゆく秋のよき夢のね

曉臈

つらう夢のねをゆく秋のよき夢のね

其角

つらう夢のねをゆく秋のよき夢のね

全

つらう夢のねをゆく秋のよき夢のね

其角

つらう夢のねをゆく秋のよき夢のね

全

つらう夢のねをゆく秋のよき夢のね

一水

初め  
 湖春  
 尚白  
 満水  
 荷子  
 下五十三

落梧  
 飲玉  
 午下  
 荷子  
 一髪  
 全  
 李晨  
 野水  
 昌碧  
 全  
 一井

後めのをたててある公権  
 石臼の破きとてあつてやつそのた  
 青くともさうさかみの見物  
 何うしき湯籠もあるは為るま  
 ぬ枯れ風乃ほほなまき吹るま  
 甚他乃うさかみ思ゆ枯れ  
 奪居て石けりまなく枯れ  
 本うさかみ吹るまけりま  
 奪移乃 略すひまあるいさ  
 寒月

落梧 胡及 文鱗 卜枝 一髮 松芳 杏雨 荻笠  
 此水 俊似

下ノ五十四

仲冬

ねろくく 清きなる寂  
 あつ候とつとてなつる  
 梅よなるる葉まきまき  
 栄の戸をひらくふむわ  
 けける葉をわらわえ  
 霜乃ねせん人の実の  
 多相恵は葉の葉の人  
 体は他氷のときふ 咽  
 けきつるまき葉まき  
 寺ねろくく 何そふ  
 兼歌雪舟

勝吉 主信 林谷 李雨 宗之 杜国 勝吉 俊似 除風 夜舟





本堂は月見之客の人の名を  
柿の実ひらけたる年乃くねを  
うまひのさきうやせんそと  
年乃くね柿の実ひらけと  
門をさうらと 拾一茶の  
田仙小前返入 老乃寒き

荷分  
内考  
龜洞

雜 年中行の十二箇内

供養遺 皇  
いとけあるとなれあひの人の姿  
とあふふ鳥居のたつた  
皆ももあつたふさふさ  
気への目やつたふさふさ  
佛蓮

荷分

下五十六

端半 終米 乞巧費 初途 櫻雪 十月 雲布 遊花  
お月燈を焚き付くる 髪持  
うまひのさきうやせんそと  
つた菜より七夕草をたつた  
仏龕の縁乃きささやあひの  
草の葉や空乃おぼろるまう  
おまの衣久よきかあつた  
赤娘の幾つて 持をたつた  
たつたや 服ふたつた

詩題十六句

今日も和詩中會春風の一時来  
水あり 添あまのさき  
白江落梅は洞水

野水

あまのつとむし不付さる梅白

春外を伴困遊心

花夢の留守よあまのつとむし

花下を伴困遊心

春入るあまのつとむし

留春春不留春人寂寞

行まもあまのつとむし

巖風吹袂衣を寒復不難

縁流の松の空 園不のあまのつとむし

池晚 蓮芳対

草の香も行水あまのつとむし

暑月公負窓行処有客来唯鶴は茶筒

涼やとて切ぬきふけり北のま

大底西時を憶吉就中斷腸是秋天

雪は露をまてふかき

春風風雨後秋も肌は彩

秋の雨とまてふかき人もた

遅く鐘は初長夜取く空何欲暎天

花とまてふかき

残影燈の暗斜光月空分輝

獨り宿やほめる白又空の月

万物秋霜は増え

白鳥やまを飛んで見む秋のま

十月江南天有妹下懐空景似表花

あつじしとあつじし 自ばくふ系

寂滅深村夜残度雪半圓

鈴あき出もあきあきやあきあき

白頭散後佛名経

佛名乃れ小徳懐く白髪外

禪図乃拵ひのりあひのり

きんくふ勢くくて

舟家

鋸鋸

付本<sup>目立</sup>突

釣瓶<sup>總弁</sup>

柳賣

馬養

かけろふ乃乃メ目あつたつあつ

あつ内周あつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

馬養

あつあつあつあつあつあつあつ

下ノ五十七

李夫人 魂在何許香煙引到焚處

越人

あつあつあつあつあつあつあつ

楊妃 雲鬢半偏新睡覺花冠不整下堂來

あつあつあつあつあつあつあつ

昭陽人 小頭鞋履紫衣裳青黛點眉細走

外人不具<sup>く</sup>庶笑

あつあつあつあつあつあつあつ

西施 宮中拾得嬌眉谷不軟吾王是愛君

あつあつあつあつあつあつあつ

王昭君 玉顏風色勝畫圖

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

約雪

申 未 午 日 辰 卯  
 官廳の政や山傳供境必由なる  
 杜若生ん後出たり 是る日也  
 漢朝の賦をみはくふ之類を  
 ありひよ盛下を踏ひとも  
 蟬乃言ふ武定乃文合とふり  
 ありしや 勢をみる せねゆ  
 所ふらるる生るるの皇遊あり

樹水 見竹 會帖 全 全

下ノ五十八

牛馬四足是謂天落馬首穿牛尾  
 是謂人  
 一方ハ梅咲桃の保あるは  
 藏舟於壑藏山於澤謂之固然而  
 夜半有る力者負之而去  
 かくかくし 呼まらるる所ふらるる  
 後聖皇知大盗る止  
 七夕よ物つらとさもわかまじり  
 ちりそそ 跡まきみのいれたが  
 鶴乃乃 雪ふたうそてあう甲  
 藤房 せくま 尻必心 腰をちうふら  
 師直 ころくくく人み見し 荊る

桂文 市山 一井 長靴

越入

一体  
いんくはせらちちりも月の雲  
法雲  
修羅小はすういもなきうら  
山岩  
朽く山ハ雲霧を減らす 雲の角  
海  
昔より一政よふ古もなうけ

名所

八重うきと奥まで見ざる 経國  
志る奥を宿や式於大江山  
おし橋乃松のたけう 統也  
第一把らうとそ花るるら波  
霞海まで見ざるわゆる花盛  
龍臣塔那を  
きつる鬼を舞うてきやうい

端水  
端水  
全

杜国  
荷子  
芭蕉  
湯水  
荷子

會帖

園中をそふたも後うらまきり外

美徳正園といふ乃山寺のたつ  
笑ゆるを見えんかみよや

芳世出て布よ素とて一文衣  
まらうや内外もなき志雲の里  
あし雨、かきまぬのや瀬田の橋  
ぬ乃あまきりけりあし雨  
牛もなし鳥羽乃むらりのあし

角田川を

いさのなき 暖湯の舟會ひよけり  
みよしゆハいつふ秋くら 貝は青  
いさよひもまききりまの 那ハ

宗政  
端

杜国  
重五  
芭蕉  
去来  
一髪

貞室  
破笠  
芭蕉

夕月や杖のみあかろる角田川

九月十三夜

唐土に富士のふけの月も  
時突のさきりこらけき羽田  
時突ハ萱は乃らよのむき  
武蔵やいし折ふもる時雨  
湖をる根々見えんむら  
かづ晴やとみり初志れ  
むらむらとみり初志れ  
先づーと生海浦と横小の  
みされの福轉轡やせ乃く  
雲は富を葉をひつろく

越人

素堂

朋及

舟支

尚白

尚白

先友

先惡

後似

一笑

湍水

下六十

よの字峰大雲の夕 かの  
早晴のやを見よとやゆき  
あつの日や不破の小家の  
旅

此ホ

芭蕉

如行

雲霞よりよふやまらふ時

芭蕉

大和出平尾村史

花の落葉よ似る白  
様愛甲を眠アて通りけり  
月乃入や舟より見よの  
のとけよや後のもろけ  
ひと月脱てくふはむ  
あゝ人の銭別

全

夕楓

一髪

荷分

芭蕉

や〜きん 涙をきて笑ひけり  
宿屋にぬふ金替宿を明やのき  
物とあつらひうちふおつと旅癒  
る目るや 柱目とせぬ市の家  
夕まふその大なる一あわり  
おきき生をさす

除風  
冬松  
昌碧  
松芳  
全下

稲妻ふたりとつとつと別るな  
なまのて往ふする 秋の蝶  
秋風ふやかねるるつとつと  
秀とたよきとつとつとつと  
さしとつとつとつとつと  
文級乃月八二人は思ふとつと

約雪  
一井  
井水  
嵐深  
荷分

下空

城人旅をけるよりつとつとつとつと

月由の経見えはあま くの人  
わ〜とつとつとつとつとつと  
わ乃棠のさきもつとつとつと

世水  
芭蕉  
路通

狩野桶くふ物甚用つとつとつと  
わ〜とつと

狩野桶ふ麻をる門ひて花の心  
とあつとつとつとつとつと  
入月ふ今あつとつとつとつと  
絆きけら 船舟とつとつとつと  
品川とつとつとつとつと  
浮庵の墓を〜とつとつとつと

荷分  
京  
ちね  
玄寮  
一井  
文鱗



草枕大も志くこころ夜ののま  
 寝られぬ刀さくさくも村まくれ  
 心痛まはせまよふかきあて  
 しく落きてそれかき袖もまろひ  
 夢も目下一羽織の綿の八中  
 其角ふりこころ時  
 いかんかみでひらひらひらひら  
 天竺てさくれあまふ 雪乃暮  
 かの虎のこころ目さめちこころ  
 里人のこころゆきさくし乃ま  
 城人と吉田の狐ま  
 雪乃れと二人寝床まこのりき

芭蕉 常秀  
 荷分 池水  
 荷分 今下  
 宗因 芭蕉

下六十二

旅真し七見しや浮世の 嬌佛  
 速懐  
 家房を捨て出れば  
 きぬ時ハ氷もさきまをさく  
 り成物守りて田をまぼろし  
 余心乃田を 蛙入るる涼世介  
 きたりて  
 父母志まらふ小糸一絳子の聲  
 心も先き成りさくよそのつて

路通 快宣 落梧  
 杜国 梅舌  
 芭蕉 荷分

さきま入湯をのふらう一盤  
 一本たかやういもひのり位食  
 肩衣ハ縹子ゆてゆを毛の支  
 似とや白髪ふらう麻布衣  
 九月十日まき草の亭ゆて  
 かくれ家やよも米のゆふ妙の菊  
 うも草を食うまきの恒根は  
 人乃塵をふかて  
 されはまのりたまの菊の宿  
 四里乃人のゆふのり  
 ちふのゆふのりゆふのりゆふ  
 録金延長ふふふふ

今 杏 兩  
 杉 風  
 龜 羽  
 嵐 守  
 曉 梧  
 芭 蕉  
 杜 国

下ノ六十五

落葉うへ身つるおねはるるま  
 何人のゆふのりゆふのりゆふのり  
 一は院送一は院  
 おひまをるる落葉うへ身つるおねはるるま  
 去る乃ゆふのりゆふのりゆふのり  
 なるもの暖南や冷ん冷の夜  
 櫓の火ふ親よまのりゆふのり  
 目も遠くゆふのりゆふのりゆふのり  
 ふるさるるゆふのりゆふのりゆふのり  
 さあゆふのりゆふのりゆふのり  
 何をまのりゆふのりゆふのりゆふのり  
 仍年や親よまのりゆふのりゆふのり

越人  
 除風  
 芭蕉  
 西武  
 去来  
 嵐  
 荷了  
 越人

妾

春の母ふれ来る人のまはる  
きぬくや余乃らりより時  
長をわけても縁又もつれ  
却平の目ふら杭きら  
空平ふ少ゆら多て見る女  
さけあし姉う宿寝い荒し

宮粉袋を顔色

宵園乃 橋を消はる目の  
一さく人待たぬとくう

たひ一日わ

はぬあを家らぬにそ

一有妻

除川

長虹

文蘭

冬文

心棘

長虹

尚白

荷子

下空四

あうかろくも明るつ  
妻の名乃らりゆら  
本乃申あくる旅乃よ  
物知のひ火燐を明て  
うらまゆら少燈消る  
山畑にの思はるや  
まゆらを敷見のそ  
おそら一もまゆらの比

無常

末坊

あうかろくも明るつ

守武

小春

越人

俊似

舟泉

虎兼

松芳

冬松

昌君

守武

暖日共ありし夜なかなかの露

今下

市松り

南を空くこの月のやま

坂元順

松坂の宿籠とくまの身ま

あふれし

摘りぬるる須見ぬえり

荷分

あふれし

あふれし人かろく消さぬ

京去来

あふれし人かろく消さぬ

あふれし人かろく消さぬ

荷分

あふれし人かろく消さぬ

あふれし人かろく消さぬ

野水

下六十五

辞世

あふれし人かろく消さぬ

あふれし人かろく消さぬ

あふれし人かろく消さぬ

落信

あふれし人かろく消さぬ

あふれし人かろく消さぬ

釣香

あふれし人かろく消さぬ

あふれし人かろく消さぬ

自悦

あふれし人かろく消さぬ

あふれし人かろく消さぬ

去来

あふれし人かろく消さぬ

あふれし人かろく消さぬ

其角

母のねむりけりてふりてきりて  
 おさまりのねむりてふりてきりて  
 人の道きり  
 押さるるもきりてふりてきりて  
 旅をて身まうける人  
 あんきりてふりてきりて  
 身近かりてふりてきりて  
 秋教  
 伊勢  
 神垣やたのひもけりて  
 肩てまゝの母をけりて  
 西行上人の百集も

尚白

芭蕉

片断

小春

芭蕉

片断

下六十六

とくまのりてふりてきりて  
 おれ一遠き  
 連翹やふりてきりて  
 うそ前木物の果るる二王  
 木履もくも傍もるるけり  
 花の寺  
 花の酒場も傍もるるけり  
 貞亨つらりの辰の春を一日  
 東照宮の別當は正の山房  
 大師は中絶の法華の傳の  
 よし一貫のふりてきりて  
 信長のふりて

荷台

胡及

松若

社国

冬松

其角

ちよりののらふむむのまゝか 越人  
 女房の徳園師と覚えそ思案とれね  
 晴き所ありけり成佛の事よきうて  
 幸ひの更なるむまのしは是  
 おろくくと落る候やふひのむ 全  
 親方身尾上の藤咲ふけり 俊必  
 古事やつゝさねとね乃莖草 井  
 八海  
 海士の家やとむむは生か 子閣  
 定ふけりふか入る寺のむむ 一井  
 夏ふかふはふの 白船 蕪葉  
 大念良あて

下ノ六十七

僧侶乃目ふ生れを山麻のふか 芭蕉  
 佛佛のそ頃 信一 志らまね 尚白  
 言の世あて  
 腰ののらふむむのむむ 一 雪  
 無ふ来て庵 一目の 法あか 一 笑  
 十如是  
 ねののの やらまて通るまらふ 荷分  
 即身即佛  
 夏陰のまふ佛ハやんの 佛分 愚益  
 むあふひや信の信をる 文分 肩弾  
 ねろくも門とあふ 法陰鬼 荷分  
 むあふの心をとむのむむ 扱丸

石室の影像鬼の棚のうらみ  
 魂をうつ舟より 酒をよめぬ  
 たぬまのつらきあはるる世氣  
 橋待の柱見とてん 雪の陰  
 平等院一切  
 捨けよあはる人ささくらけり  
 稻妻小文仏 ねむる中  
 植越ふ引守 櫻くまき  
 ある人四時乃 急物あつと  
 納を不食不圖を 心感して  
 房さくら  
 鷹くみぬむ 心あつと  
 荷子  
 文里  
 亀洞  
 約雪  
 枝  
 俊似  
 枝

あゝ寺の奥なる  
 燕日 此寺乃 鼓々々々々  
 すみおや坊さくらも月の舟  
 社乃子ふ本 経をうらむは 師  
 人の心さふあつと 心あつと  
 まいさくら  
 夜長そて又さくら 一時雨  
 鎌倉の安園輪さくら  
 たうとさくら 涙や直さくら  
 古寺の雪  
 曙名 佐藍くの 雪見 とい  
 其角  
 一井  
 一井  
 ト枝  
 前弾  
 越人  
 若子

如寒者  
如探者  
如商人  
如舟  
如夜  
如病  
如晴

無かれやあゝ二王乃行統  
 ぼくろゝとてあゝあゝあゝ  
 物空味さる人乃さるや神さる  
 子視つてももくせし一年の書  
 其藥王品七百  
 まろ向い梅乃暖らうまみ  
 雪乃日也 湯行捨あまの家  
 双六のあひそいあむつりか  
 竹さくくあひららうさけ  
 月の頂 漲乃後まさりか  
 うんくもまはあ見付る山  
 行乃新やたひゆと記さる

俊似  
 一井  
 文潤  
 其角  
 湖及

下ノ六十九

神祇

吉宮や愛あるかゝる 柳下尺

二月五日

早き〜もや廿四日の月乃梅  
 あり〜と梅ちうかゝる庭ひル  
 常もあゝいひてあゝ 林は梅  
 上り空さるぬやうふ林の空  
 地の中うなるけりひんの中  
 何れもあゝあゝあゝ 梅の花  
 賞さなくあゝあゝあゝ 神の梅  
 月代もあゝあゝあゝ 梅は空  
 門あゝあゝ梅は空あゝあゝ

約雪  
 荷分  
 全  
 龜洞  
 昌碧  
 舟人  
 兩泉  
 直五



佐了見る人此後りさあふ  
 花不本て嵩山を望み見る  
 宮の後川流る見るさあふ  
 川も洗の事案の中り  
 ほくまの神楽の事案の中り  
 穴寺の灯をりさあふ  
 被扇一ばななく  
 川をりさあふ  
 此月の事案の中り  
 冬も花の事案の中り

若宮奉納

女寮 鈍可 李挑 好葉 玄寮 龜刑 未学 荷分 尚白 松芳 落梧

下ノ七十

まくねおのり  
 此の方と寐中  
 珍麻川夜明乃  
 妙つ支の神  
 栲杖や

利重 野水 昌碧 村俊 卜枝

肩付六のり

冬文

荷分四十の事

幾事も行  
 君う代や  
 言書六何  
 言書六何

重五 越人 午下 龜洞

千代の花のむしの寺一とう宗 日  
春一くれ居る人の中野原  
先従へ梅を公の冬ごもり  
大井川の田く徳田福本氏の  
のこふとまうと

ささられのすけがも大井川 芭蕉  
う川のふしき  
ささらぬや梅のそまをわすれ  
みよのふしきわらふふしき  
まらふふしのふしきわらふふしき  
古柳  
里東  
楚舟

下七十一

曠野集頁弁

禪の心はたのしみかたな中中あらんわらふし  
田母我東田母の藤をたのしみかんわらふし  
佐川田母のふしきわらふふし  
又まふしきわらふふし  
作て芭蕉のふしきわらふふし  
田母居るころとて中中あらんわらふし  
けり中中あらんわらふふし  
種をわらふふし  
種をわらふふし  
種をわらふふし

素堂

あつて人ののほかにあつては  
三入の世をたまたま

くちのまはしつゝあつては  
橋の暗もあつてはまは  
あつてはあつてはあつては  
門の各月付の園乃あつては  
風乃同利を初めはあつては  
武士の舞のつらあつては  
まはつてはあつてはあつては  
あつてはあつてはあつては  
あつてはあつてはあつては  
あつてはあつてはあつては

越荷能

水人分水人分水人分

下七十三

千のひまひ北山のつら  
焼きつゝ一室様もあつては  
あつてはあつてはあつては  
あつてはあつてはあつては  
あつてはあつてはあつては  
あつてはあつてはあつては  
あつてはあつてはあつては  
あつてはあつてはあつては  
あつてはあつてはあつては  
あつてはあつてはあつては  
あつてはあつてはあつては  
あつてはあつてはあつては

水人分水人分水人分

さうかへちまなりみまはるつ  
月の影より合ひけり 辻森  
松よなるより 甲子 阿彌  
香し〜〜〜 女が精霊の 宇治  
晴〜とあけし 不破乃 宗兄  
おあまる 海へ 流るるよし  
火着ろとわたり 舟のり  
おれもの 目を見よと人の 意  
あせはるるを 池の 久し  
はさうし ぬき ぬき ぬき  
捨て まるる 舟 ぬき  
軍とあへ 舟 ぬき

水人分 水人分 水人分 水人分 水人分

下七十三

大根さ〜〜 干の〜〜

遠浅や 舟の ちり ぬき  
さ〜の 舟の ちり ぬき  
の〜の 舟の ちり ぬき  
下白乃 舟の ちり ぬき  
夕月乃 舟の ちり ぬき  
秋宵乃 舟の ちり ぬき  
秋の 舟の ちり ぬき  
一 舟の ちり ぬき  
道の 舟の ちり ぬき  
楽さる 舟の ちり ぬき

亀洞 舟 舟 舟 舟 舟  
昌碧 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟



人かゝる眼もまじりて  
ついでにうらなふ  
舟泉  
水

美しき鞍もはけりまはれ  
舟泉

柳乃らゝんか  
冬文

夕霞傳物もくえり  
冬文

雲もたやうの月  
荷分

秋葉もさきもたやう  
松芳

弓ひはめく  
舟泉

けふも又の捨り  
荷分

あまの  
冬文

火龍の皮も  
舟泉

候見せしところ  
松芳  
さるる  
冬文  
酒もさるる  
荷分  
幾もさるる  
松芳  
よまて  
舟泉  
なす  
荷分  
月の  
冬文  
灯も  
舟泉  
寂も  
松芳  
厚も  
冬文  
十月  
荷分  
心  
松芳

長持りゆき  
ささげにや  
まのなを  
ささげにや  
ささげにや  
ささげにや  
ささげにや  
ささげにや  
ささげにや  
ささげにや

舟泉  
荷分  
冬文  
舟泉  
松芳  
荷分  
冬文  
舟泉

顔見ふゆき  
ささげにや  
ささげにや  
ささげにや  
ささげにや  
ささげにや

松芳  
冬文  
荷分

月乃秋遠のきささげにや  
初らふささげにや  
一からあまのきささげにや  
紫物あまのきささげにや  
あまのきささげにや  
あまのきささげにや

舟水  
荷分  
冬文  
舟水

土肥をみくふくまよきく  
 下米のふくま 神そののふくま  
 通海をくふくま 神そののふくま  
 六信ふくま 神そののふくま  
 代ふくま 神そののふくま  
 浅一書ふくま 神そののふくま  
 月の初学ふくま 神そののふくま  
 益受けふくま 神そののふくま  
 天仙ふくま 神そののふくま  
 かけうねふくま 神そののふくま  
 かくふくま 神そののふくま  
 かくふくま 神そののふくま

水全 水全 水全 水全 水全 水全 水全 水全

下七十七

初めく肥具は渡けく甲斐  
 秋の初めく 昔 浮指 度  
 八日の月代 昔 浮指 度  
 山乃端ふ 昔 浮指 度  
 暑き日 昔 浮指 度  
 左鼓く 昔 浮指 度  
 右鼓く 昔 浮指 度  
 左鼓く 昔 浮指 度  
 右鼓く 昔 浮指 度  
 左鼓く 昔 浮指 度  
 右鼓く 昔 浮指 度

水 水 水 水 水 水 水 水



二方の数むらうと火あふらう  
世乃草鞋たき人たむら  
馬も小埴大系 送坂の花  
人あひよわ たる乃 川原

全水全

月か栞かたしめらるるに因り  
ぬらばらるるに因り  
あふらるるに因り  
あふらるるに因り  
あふらるるに因り  
あふらるるに因り  
あふらるるに因り  
あふらるるに因り  
あふらるるに因り  
あふらるるに因り

今下  
今下

下七十八

おのひうけの風あふのそら  
真本栞つとあふ人てよら  
役乃あふのあふらるるに因り  
あふらるるに因り  
あふらるるに因り  
あふらるるに因り  
あふらるるに因り  
あふらるるに因り  
あふらるるに因り  
あふらるるに因り  
あふらるるに因り

全人全下今人全下全人全

花露のうら書り文字のゆらむ  
花乃葉ふさふさくくねる涙落る  
若のの〜 霧乃 ちんきま〜 風  
うち輝て浦の心さのほ手集  
内へさつてなさをい〜 犬  
碎さるるあお波たはあれ  
ゆ〜 志乃の〜 雨乃あつ  
秋合指合 薄青さの〜  
ま〜 献まの みるらひり  
灯巻のゆあり〜 押〜  
白さあ〜 舟の〜 舟の〜  
あ〜 風よあ〜

下全八全下全人全下全人全

トキ九

花乃あつる 花乃あつるの程  
あつ〜 月夜〜 影の程  
人あつる〜 影の程  
あつ〜 影の程  
千舟のあつる 中  
おろ〜 山行乃富の馬時  
は〜 同乃 念佛  
百あつる〜 影の程  
田粟ま〜 影の程

下全人下人下人下全

源門乃影  
花乃あつる〜 影の程

越入

酒あめあふま乃はの月  
最たる手 法を野屋のあつらん  
おきたまれいふ 秋乃夕くれ  
瓢箪乃大まきこみ石をうて  
風ふらふまて 降る 市人  
かふあまの 長安の是名利の飛  
匠のあれまきをも目くらりけれ  
しそつと師老の空ままおそ  
おつと世法をく 寺の跡つら  
け甲ふ古まきまを名まらえ  
皇法まをぬ 雨のふけか乃  
まらへくやあつらんあつらん

芭蕉 全 越人 全 芭蕉 全 越人 芭蕉 全 越人 芭蕉 全 越人 芭蕉

下八十

月影まらめさつ輝乃まら  
まらつらぬ馬乃 山腰まらつらぬ  
物らそらまら 舟路かろけり  
月と花はまら乃こを根と地うて  
雲雀まき入つらまらの 恥 ぬま  
被ま戸乃 釘うち付らまら入る末  
見まらまらひらまらまらひら  
家まらまら 板あまらつらまら  
ゆのあまらひまら 跡の物らひ  
人まらまらひまらまらひまら  
初ぬま 籠ら 堂乃 屏風  
まらまらひまらまらひまら

越人 芭蕉 越人 芭蕉 越人 芭蕉 全 越人 芭蕉 全 越人 芭蕉

垣柱乃ききけ 高ふふたれて  
らやちよまがら 姉、父なるぬ  
あの雲ふらう 候つこい そ  
れ月のこころの空を 深きこふ  
砵もまきく 鱈ふり春 ふうり  
秋の田きこふぬいふりの長びきを  
さつくさつく 文字 同ふれり  
りりりく尾底の 木葉を  
池ききこふまの恋を ぬいぬい  
花乃頃 浅きまのうらみ  
果りを喰めて 睡きこら

菘 人 菘 人 菘 人 菘 人 菘 人 菘

下ノ八十一

あふ伴あつてあふ人のあつども  
菘のまのたのがけ 支や天候  
と花の月見雲なるけり  
菘のまのまのまを けりつて  
候てつてつて 葉ハあふなる  
許つてあつて 候てつてつて  
菘のまのまのまのまのまのま  
候てつてつて 候てつてつて  
静にあつて 候てつてつて  
空のまのまのまのまのまのま  
あつてつてつて 金二万両  
あつてつてつて 他人ともあつて

其角

人 全 角 全 人 全 角 全 人 全



ひろき へき 煥 續乃 さま

我も一 新 海 八 人の 碑 をか  
秋うそ 雲 一 山 にも 湯 懸  
月の 宿 書 成 じ ち なる 中 実 ね  
外 面 菜 菜 の 草 一 け ぬ け  
た ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
川 越 ぬ ぬ ぬ 城 下 の み ち  
抱 疾 自 の 遠 通 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
留 ち ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
な ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
後 ち ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

全

越 人

越 全 雪 全 人 全 雪 全 人

下八十三

と 物 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
行 燈 ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
美 物 ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
明 月 只 雲 ち ち ち ち ち ち ち ち  
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
つ 是 ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
よ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

人 鼠 雪 越 人 雪 越 人

初 雪 ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
月 の み ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
山 川 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

野水 落梧 全

賤をまきつゝ見せし人くらけり  
 ありしはぬ押合月と草紙の  
 ありしはぬ長櫃の萩  
 川紙の歩ふききけ秋の雨  
 わかるところ類乃きききき  
 つらきききつらけりかた櫃の子  
 更なる夜湯ハちうをみ飲て  
 あそくつ起きお佐乃傍  
 岩のまあちまいあうをえさう  
 様さるうちの 公家麗さ  
 京のいひまのまのうまの一文不

水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 全 水

下八十四

下八十四の月のおわろり  
 耳や齒やよももたの物あは  
 具はまけふけふの 初午  
 りのやもも考ゆぬ此あふ  
 山伏位そ 人あうる なる  
 くらしくとくまひぬけを果車  
 桃灯とてあそくきききれ  
 何れをほけん髪を接あむい  
 あうく物もいらぬはれなき  
 たるうしとやううふくまのそ  
 かる府中を 給わうり ゆく  
 兩やもも無のちまうくおのらや

梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 全 梧 水 梧

柳らるるを 例乃 慈 乃  
 好かろく月こそさられぬする  
 寂しき秋を女丈夫居りけり  
 占せよと申小外きりうらやぬ  
 香めそと名はひめへの酒  
 物ともの干奥備ふる頃不  
 許より世を先へ見せと  
 春無事くふり法あえきぬ  
 福ありあろくと聖女養修り

水 全 梧 全 水 梧 全 水 梧

一 甲乃 炭賣りのり みるん  
 うきひの 光の 籠 氷の 物

一 井  
 嵐 澤

下八十五

きたらまや西本を引不誘老  
 肩夜とらま 洒ふよ人  
 夕月の入まき 早き 塘  
 多らるる解をばさむ 秋  
 甲乃 誦 高の 二三日  
 宮司の妻小むとらまを憂  
 回らまとも 疾ふりの 高き  
 葛屋のまきと 切やく 文  
 うとくと寐起かろふ湯をさる  
 室印く 秋半の 越の 考  
 なありのよまろ 阿ひさる  
 指ろく みる 女中 かなり

一 井 嵐 澤 一 井 嵐 澤  
 長 虹 及 胡 及 胡 及  
 長 虹 及 胡 及 胡 及  
 一 井 嵐 澤 一 井 嵐 澤



浦風小脛吹まくる月涼  
 みつものあき紀伊の山を  
 若者乃き一夫射てたる花の法  
 蘇くくふ香ふをまきりけり  
 たるのこれけりまを賭せん  
 奥子乃緒の裾小 落付く  
 たるのまき内もまきく 意は  
 空をやとひる 好香を物りり  
 本をまきまわつるうやじ松の枝  
 押ふくく 人く 乃 貞  
 此年ふなりて葵の道もなま  
 まくも世は ばい寐入月

長虹 一井 胡及 龍井 長虹 一井 胡及 龍井

下六十六

あきまき 藤子のたのうをまき  
 あきまき 藤子のたのうをまき  
 以の枝入及の宮のまきけり  
 衣引くあき 人の 且は  
 毒たつと瓜 一まきれも冷ぬ  
 片風まきまき 白雨  
 板屋まきまき 遊所なき庭の内  
 たるのぬめりる 馬まき 庚戌  
 ぬくくと 日笠の知れぬ花を  
 不きまきまき ぬつてく  
 元祿壬申冬許六亭奥行  
 けりまきまき 人神まき

胡及 長虹 一井 胡及 龍井 長虹 一井 胡及 龍井

元祿

中六仕有るる書のありし如  
 池実成うん小粒の空際しそ  
 けのまゝらり 林の風を  
 客の月更入しを 古  
 先を更すす 故屋の約やう  
 女たりの信事中に勝まはせ  
 焼鳥コカ〜 少年あひ〜 酒を  
 糎カつむさのまやま子 ぬさる  
 煨カ礮成のわらち〜 の入に  
 半らハ燈らぬ人もうもを  
 新造のけ〜 塙のくひ施き  
 芳晴らあ〜 芳林の上を遠〜

許六 酒堂 盛水 嵐蘭 筆 翁 六 堂 水 翁

下八十七

小ぢう 蔭の風をよびし  
 八月の暮る向あき 小枝燈  
 焼ふとちそのまきのあをけ  
 打かゝる鳥も花の本陰あて  
 は〜もまのまの卵もふ  
 まのまの鳥のまのまのま  
 高の麻の也を けりしす  
 さけらり〜 舞ふに年まで  
 赤雲た〜 ち〜 持の〜  
 灯の影あり〜 甲 袴  
 山や〜 山 山 山  
 児を六 新もあ〜 元ゆりさる

六 堂 葉 水 翁 六 堂 葉 水 翁 六 堂

尾月かよふ世の女房  
 いちぢうも喜ぶ世のくまのてん  
 琵琶をわくくくくくくく  
 有のハ昆沙の堂の小方丈  
 左のまうぬ板やきき  
 一すうもまきまきまきのちまきまき  
 篠のまうぬ板やきき  
 宗長のうきす白も茶のぬ  
 茶のまきまきまきのちまきまき  
 茶のまきまきまきのちまきまき  
 七十の愛のまきまきまきのちまきまき

茶 水 翁 六 堂 茶 水 翁 六 堂 茶

下八十八

茶  
 水  
 翁  
 六  
 堂  
 茶  
 水  
 翁  
 六  
 堂  
 茶

